

ミニシアター校外実習レポート

外国語学部 中国語学科3年
秋山ゼミナール：安澤愛乃、久保文乃、三浦優弥、木下秀美

こんにちは、中国語学科、秋山ゼミです。前期に続く後期のフィールドワークでは、地元横浜のミニシアター「シネマ・ジャック&ベティ」（中区若葉町3）を訪ね、香港映画『七人樂隊』（2020）を鑑賞しました。作品鑑賞の後、「シネマ・ジャック&ベティ」副支配人の小林良夫さんに、劇場の歴史や下町のミニシアターについてのお話を伺い、貴重な映写機の残る映写室を案内していただきました。これからその様子を紹介していきたいと思います。

（木下 秀美）

今回のフィールドワークでは、2020年、第73回カンヌ国際映画祭のオフィシャルセレクトション作品である『七人樂隊』を鑑賞しました。同作は香港を代表する七人の監督による「香港七重奏」と謳われるオムニバス映画です。1本目はサモ・ハンの「稽古」、2本目はアン・ホイの「校長先生」、3本目はパトリック・タムの「別れの夜」、4本目はユエン・ウーピン「の「帰郷」、5本目はジョニー・トーの「ぼろ儲け」、6本目はリンゴ・ラムの「道に迷う」、7本目はツイ・ハークの「深い会話」という構成です。映画全体で私にとって

最も印象的だったのは、4本目の作品「帰郷」です。主人公のおじいちゃんが、英語が不安だからという理由で香港を離れないというストーリーが記憶に鮮明で、また、孫と祖父でカンフーと英語を教え合うシーンには心が温まりました。

（久保 文乃）

次にジャック&ベティについてお話します。当日は副支配人である小林さんからお話を伺い、特別に映写室にも案内してもらいました。まず小林さんについてご紹介します。小林さんはもともとサラリーマンでしたが、町おこしをしたいという思いから23歳という若さで脱サラし、仲間二人とともに、1952年設立の「横浜名画座」を引き継ぐ形で1991年にオープンしたのち一時間閉館していたジャック&ベティの経営を2007年から行っています。お話を伺った時、町おこしの一環としてこのミニシアターを再生されたことに非常に驚き、その行動力に感化されました。

お話の後、普段は入らない映写室に特別に案内してもらいました。たくさんの映写機が並ぶ中、現代では珍しいフィルムの映写機も置いてあり、

とても興奮しました。現在もそのフィルム映写機で映画を上映することもあるそうで、主流となっているデジタル・プロジェクターとフィルム映写機で映した映画がどのように違っているのか、いつか体験してみたいと思いました。

（安澤 愛乃）

最後に、今回秋山ゼミのフィールドワークでジャック&ベティに行ってみて、特に感銘を受けた点は、この劇場が地域活動にとっても積極的であるということです。前述の通り、ジャック&ベティは横浜名画座時代から数えて創立70年の歴史ある映画館であり、副支配人の小林さんたちは町おこしをコンセプトに現在も映画館を運営されています。その中には、東京などで上映した新作のみならず、独自にセレクトションした新作や旧作をジャック&ベティで上映し、地方に多様な映画を広めるといった活動のほか、定期的な野外上映や中華街などの劇場外会場での上映や、地元ギャラリと連携した交流イベントの開催などがあります。こうした、地域に寄り添い、町を活性化するための取り組みが、ジャック&ベティが長年地

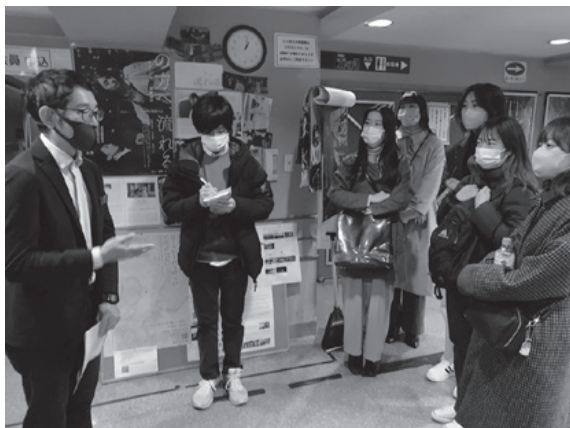


ジャック & ベティの前での集合写真

元で愛されてきた大切な要因なのではないかと思
いました。

この記事を読んでいる皆さんもジャック&ベ
ティという素敵な映画館に是非足を運んでみてく
ださい。黄金町駅または阪東橋駅から徒歩数分、
また、みなとみらいキャンパス近くからは一本で
行ける複数のバス路線が出ています。

（三浦 優弥）



副支配人の小林さんからお話を聞いている様子



映写室に置いてある貴重なフィルム映写機